令和７年度

第３９回　少年の主張甘楽町大会

発 表 文 集

甘楽町教育委員会

目　次

◆最優秀賞

・向き合う　……甘楽町立甘楽中学校一年　森田花絵　1

・手紙を書こう　……甘楽町立甘楽中学校二年　荒屋こころ　3

・自分らしさ　……甘楽町立甘楽中学校三年　清水空麗　5

◆優秀賞

・あいさつの大切さ　……甘楽町立甘楽中学校一年　林愛莉　8

・時間の使い方　……甘楽町立甘楽中学校一年　田村明花　10

・大切な時間　……甘楽町立甘楽中学校二年　谷川絢香　12

・未来に繋げる日本の礼儀　……甘楽町立甘楽中学校二年　髙橋季歩　14

・知らなかった温かさ　……甘楽町立甘楽中学校三年　植松結希歩　16

・私たちなら大丈夫　……甘楽町立甘楽中学校三年　中島千菜乃　19

（敬称略）

ページ

＊原文のまま、各賞ごと学年順に掲載しています

向き合う

甘楽町立甘楽中学校
一年　森田　花絵

「あ、あった。本当にあった！」

私は、今年の２月広島県に行きました。なぜ広島を訪れたのかというと、小学生の時の国語の教科書にのっていたお話「たずね人」を確かめるためでした。「たずね人」は、主人公が駅に貼ってあった原爆供養塔のポスターに自分と同じ名前を見つけ、供養塔を訪れるお話です。小学校で勉強したときに「本当にこんな場所あるのかな」と思い、母に広島に行ってみたいとお願いしました。

広島平和記念公園に着くと、原爆ドーム、原爆の子の像、平和の鐘を見学し、公園を歩いていくと、原爆供養塔がありました。そこには、教科書に出てきた原爆供養塔が本当にあったのです。公園の外れにひっそりとありました。物語に書かれていた「遺族をさがしています」という名簿も実際にあったのです。そして、こんもりとふくらんだ丘もあり、丘の周りをほうきで掃いた跡までもあり、教科書の話と全く同じで驚きました。私は、なんだかドキドキしました。うれしいような悲しいような不思議な気持ちになりました。原爆供養塔納骨名簿をじっくりと見ると、数えきれないほどの人の名前が小さくのせられていました。教科書と同じように私と同じ名前があったらどうしようと少し怖くなりました。原爆供養塔納骨名簿が掛けられている屋根には色とりどりの千羽鶴がいくつも下げられ、供養塔の前にはお花とお水が供えられていました。人気がなく公園の端の方にある原爆供養塔ですが、大切に守られていることが伝わってきました。

毎年、国語の教科書には戦争の話がのっていて、今までも戦争について勉強してきました。

しかし私は、どこか遠くの国の昔の話のように感じていました。でも、広島に行ってみて変わりました。戦争は、本当にあったことなんだと実感しました。原爆供養塔を見た後に入った平和記念資料館は衝撃的でした。人々が焼けただれた写真、被ばくした後にどんどん髪の毛が抜け落ちてぼうず頭になった女の子の写真、顔が溶けて目が飛び出している写真、黒焦げのお弁当箱、ボロボロの服・・・。恐怖でした。私は、母に「もう出ようよ。」と思わず言いました。そして、原爆の子の像のモデルは私と同じ十二歳の少女だということも、資料館に入って知りました。そのあとも思い出しては怖くなり、その夜はよく眠れませんでした。広島に来たことを後悔するほどでした。でも、「来て見てよかったね。戦争の怖さがよく分かったね。」と母は言いました。母のその言葉を聞いて、本当にその通りだなと気づきました。今まで国語や社会で戦争について勉強した時も「怖いな。かわいそうだな」と思いましたが、現実として考えていませんでした。

今年は終戦から八十年目だそうです。皆さんは八十年をどう感じますか？大昔のことと感じますか？それとも最近と思いますか？私は、広島県に行ってから、最近起こったことと感じるようになりました。これまではどこか遠くの昔話だと感じ、日本の今の、平和のありがたさを実感できません。しかし、平和は、当たり前ではないのです。世界では資料館で見たことと同じことが起こっていると思うと胸が痛くなります。

これからの私たちにできることは、戦争の怖さから目をそらさずにしっかりと向き合うことです。戦争についての物語を読んだり、資料を見たりして、戦争の怖さを知ることです。その怖さを私たちが知るとともに、知らない世代に伝えていくことだと思います。平和な世界を築いていくために。

手紙を書こう

甘楽町立甘楽中学校
二年　荒屋　こころ

皆さんは、ここ五年の間で、手紙を書いた記憶はありますか。それは、いつ、誰に贈ったものですか。

最近の日本では、手紙を送る文化が廃れてきているのではないかと私は感じています。そう感じたきっかけは、あるニュースからでした。郵便局の数が減っているというものです。「ああ、確かに誰かに手紙って、年賀状以外に出したことないな。」私はそう思いました。そして、「自分にも手紙を送る文化がない」ということに驚きました。

株式会社ネオマーケティングが行った「手紙と対人コミュニケーション力に関する調査」によると、直近で手紙を書いたのが五年前だと答える人が、なんと五五・一パーセントもいました。統計をとった二十代から八十代の男女八〇〇人のうち、半数が手紙を五年間も書いていないのです。改めて数字にすると、これは由々しき問題だということがわかりました。

では手紙の他に、何で連絡を取っているのでしょうか。それは、やはりスマートフォンです。その中の一例としてラインが挙げられます。ラインは、まるで直接会って話しているかのように、テンポ良くやり取りを行うことができます。何か伝えなくてはならない重要な情報もすぐに伝えることができ、とても便利です。一方で、直接会っているわけではないので、表情や声色がわからず、伝えたい意味とは違う解釈をしてしまうことがあります。

そこで、ラインと比較して手紙の良さについて考えてみました。手紙は、そもそも書くのに時間がかかります。しかし、相手に伝えたい思いをじっくりと考え、文章を推敲することができます。ラインのようにすぐに取り消したり、送り直すことができないため、じっくりと見直し、丁寧な気持ちで整えることができます。また、筆跡やインクの色や濃さなどからその人の個性が出ます。季節に合った便せんや、相手の好きなイラスト選びなど、さまざまな工夫ができます。手間や時間をかけることで、

相手に気持ちが伝わりやすくなります。相手を思い、手間や時間をかけた手紙からは、贈ってくれた人からの温かみを感じられるので、とても素敵な文化だといえます。

私には、毎年、年賀状を出してくれる人がいます。その人たちから年賀状が届くと、「今年も来たー！」と、とてもうれしくなります。小さな葉書に込められた思いや、その年ならではのデザインが嬉しくて、年賀状が届くたびに、その人のもとへまっしぐらに駆け寄って、「年賀状ありがとう」と言いたくなります。しかし、冬休みが明けるまでにあと一週間ほどあり、少し離れた場所に住んでいる親戚にはなかなか会いに行くことはできません。そこで、その時のうれしさや感謝などの一番熱い気持ちを、自分で年賀状に込めます。一枚一枚にメッセージを書いて、たまにイラストを描いてみたりして、少し遅めですが、ポストに投函します。冬の寒い時期ですが、年賀状を出すときは、温かく、幸せな気持ちでいられます。このように、今は年賀状くらいしか出すことはありませんが、バースデーカードや暑中見舞いなど、相手を思って作成する葉書や手紙を、今後は出してみたいと思います。

確かにラインやメールは便利で、伝えたい情報をすぐに伝えることができます。しかし、便利にばかりとらわれて手紙の文化を忘れてしまうのは、悲しいこと、寂しいこと）だと思います。手紙には手紙の良さがあります。一年に一度でも、大切な人に、自分の気持ちを丁寧に届けてみてはいかがでしょうか。

自分らしさ

甘楽町立甘楽中学校
三年　清水　空麗

自分のことについて、どれくらい分かっていますか？名前や誕生日、好きなもの苦手なもの、自分のことだから全部知っていますよね。では、「自分らしさ」についてどれくらい分かっていますか？少し質問が変わっただけで、私は途端に分からなくなったり、自信をもって答えられなくなったりします。そもそも「自分らしさ」とは何でしょうか？

辞書で調べたところ、自分らしさとは「一般的には、他者にとらわれず自分の価値観や性格を尊重している状態のこと」だそうです。それを知って私は「他者にとらわれず」という部分が難しいと感じました。

本当は好きなのに、大して詳しくないから知らないふりをしたり、得意なことがあるのに、「上には上がいる」と勝手に思って言えなかったり、努力を褒めてもらえたのに、うぬぼれていると思われたくなくて謙遜してしまったり。私はそんな風に物事をとてもネガティブに捉えていました。人にどう思われているか、嫌われていないかを気にして、自分らしさを抑え込んでいたのです。

「そんな自分を変えたい。」そう思うようになったのは、妹の言葉がきっかけでした。私には双子の妹がいます。友達のように仲が良く、何でも言い合える関係です。だからこそ、妹に褒めてもらえたときや認めてもらえたときはとてもうれしくなります。しかし、私はそんな時も素直になることができず、「そんなことないよ。」といつも言ってしまいます。ある日、学校の総合の授業で自分のことについて考える機会がありました。私は、長所や好きなものについて、自分のことなのによく分からず、悩んでしまいました。家に帰ってその事を家族に話しました。すると、妹が「空麗は、優しいし、周りをよく見られていると思うよ。」と言ってくれました。しかし、私は困っている人を助けられないし、前に「空気が読めない」とも言

われたことがあったので、「そうかな～？どうだろう？」と曖昧な反応をしてしまいました。そんな風に言葉を濁す私に向かって妹は、真剣な顔で怒ったようにこう言いました。「何でそんなに自分に自信がないの？私が思う空麗の良いところを全部、本人に否定されたら、私も悲しくなる。もっと自分らしくしなよ！」と。その言葉は、冷たいようにも感じましたが、妹なりの優しさと気遣いも感じられとてもうれしかったです。

それから私は、自分を否定したり無理に謙遜したりするのをやめてみました。好きなものは「好き」と言い、褒めてもらえたら素直に「ありがとう」と返す。ほんの些細な違いですが、とても自分らしさを感じられるようになりました。周りに合わせることができるのは協調性があり、周囲をよく見られているとも言えます。しかし、それは時に自分の個性や良さつまり「自分らしさ」をなくしてしまうことにも繋がります。

インターネットが普及した現代では、他人の様々な情報を簡単に得ることができます。そして、他人と自分を比べて自信をなくしたり、落ち込んだりする人が増えているのではないでしょうか。そんな時代だからこそ、今一度「自分らしさ」について考える必要があると思います。日々変化する社会を生きる私たちは、周りの目や大勢の意見にとらわれて自分を見失いがちです。でも、そのせいで今を心から楽しめないのは本当にもったいないと思いませんか？

とはいえ、いつも自分らしくいられるわけではありません。私は、他人と自分を比較して落ち込んで自信をなくす度に「自分らしさって何だろう？」と悩んでしまいます。しかし、そんなことを繰り返していくうちに、「それでもいいのではないか。」と気がつくようになりました。いつでも自分らしくいられなくても別に無理する必要はないと思います。大切なのは、どんな自分も認めてあげて大事にすることです。みんなが自分らしくいることを認め合えれば、差別や偏見もなくなり、心から平和を感じられる社会となるのではないでしょうか。私はこれから自分を否定せず、良いところもダメなところも全部認めて「自分らしく」い

たいです。

あいさつの大切さ

甘楽町立甘楽中学校
一年　林　愛莉

挨拶は人と会ったときに一番始めに言う言葉です。これは家族にも、友達にも、先生にも、地域の人にも、誰にでも行う朝の日課のようなものです。

私は学級代表として、朝学校の玄関前に立ち、登校してくる同級生や上級生に挨拶をしています。「おはようございます」と私たちより先に挨拶をしてくれる人や大きな声で挨拶してくれる人がいるとすごくうれしい気持ちになります。逆に、小さな声で挨拶をする人やお辞儀だけする人がいると少し悲しい気持ちになり、心がモヤモヤします。私は、挨拶をした方が気持ちよくなり、朝からよい１日を過ごせると思います。

挨拶は、相手に感謝の気持ちや敬意を伝えられ良い人間関係を築けます。また、挨拶をすることで、自分自身も前向きになり、自己肯定感を高めるというメリットがあります。これは、礼儀にもつながります。礼儀も相手に敬意を表す意味も持っています。

私は空手道を習っていますが、入室する際は先生と道場に向かって挨拶をします。そして道場を出る際も同じことを必ずします。武道は「礼に始まり、礼に終わる」と言われるように、礼儀は武道の基本中の基本です。空手では、型と組手がありますが、いずれの競技も必ず礼をしてから試合が始まります。

空手道は相手がいることで成立する競技です。人を傷つけるためのものではなく、自分自身を守り自己を高めるためのものです。そのため、相手を尊重し、お互いを理解し合うことで成長を助け合い、人間関係を良好にすることができます。それは、対戦相手が日本人でも外国人でも同じことが言えます。

私は昨年空手道の世界大会に出場しました。外国人と戦うことは初めてで、とても緊張していましたが、試合前の礼をすることで、いつも通りの平常心を取り戻し、堂々とした試合をすることができました。そして、試合後は、対戦相手とお互いの気持ちが打ち解け、「ハロー」と挨拶を交わすことができ、英語で色々と会話をし、国旗バッチや自国のお菓子交換するほど仲良くなりました。私はこの時、「挨拶」「礼儀」でコミュニケーションがとれることを実感し、うれしく思いました。

挨拶はこのように世界で必ず共通します。世界では挨拶をしない国はないそうです。挨拶は、「おはようございます。」、「おやすみなさい。」、「いただきます。」、「ごちそうさまでした。」など多々ありますが、「いただきます。」と「ごちそうさま。」は日本にしかなく、日本の文化でもあります。これは、自然への感謝や食べ物を通して命とつながるという日本独自の文化に根付いた言葉だそうです。

私は、自然やものにも感謝する日本独特のこの文化を素敵だと思います。長い年月をかけて築き上げたこの文化を、受け継いでいってほしいと思いました。

私が考えるには、挨拶をして損はないと思います。

もしも「あいさつ」をしなかったら、「ああ、この人は挨拶もできない人なんだ。」と悪い印象を持たれてしまいます。挨拶は、社会生活を送る上で欠かせないマナーであり、自分だけでなく、周囲の人にも良い影響を与える大切な行動です。挨拶をすることによって、信頼感も生まれます。

だから私は毎日必ず一回は「おはようございます。」を元気に言いたいです。そして、楽しく、明るい甘楽中学校を築いていきたいです。

時間の使い方

甘楽町立甘楽中学校
一年　田村　明花

みなさんは「時間の使い方」について考えたことがありますか。また、みなさんにとって「時間」とはどのようなものですか。

私は中学生になり、時間の大切さに改めて気付かされました。時間は一度使ったら二度と戻ってこない貴重なものです。だからこそ私たちは、正しい時間の使い方を考え、大切に使わなければいけません。

しかし、忙しい日々の中で時間を上手に使うことは難しいことでもあります。でも、私たちが時間を無駄にすることなく生活するためには、今の時間の使い方を見直し、今やるべきことは何か、正しい時間の使い方とはどのようなことなのかを考えることが大切だと思います。

私は中学生になってから、部活動や勉強、習い事など、やらなければいけないことが増え、毎日がとても忙しくなりました。小学校の頃は、学校から帰ったら友達と遊んだり、家でゆっくり休んだりするなど、毎日時間に余裕がある生活を送っていました。

しかし、今はそんな小学生の頃の感覚で過ごしていたら、時間が全く足りません。そこで改めて気付かされたことは、時間には限りがあり、とても貴重で大切なものだということです。このことから、「今ある時間を大切にしよう」という気持ちが自分の中で強くなりました。

また、一日は二十四時間しかありません。私はその二十四時間の中で、何を優先して何にどれだけの時間を使うかなど、特に忙しい日々を送る中では時間配分がとても大切なことだと思います。

しかし、私は貴重な時間を息抜きに使いすぎて、宿題ややるべき事を後回しにしてしまった経験があります。その時は後になって時間が足りず、大変

な思いをしました。みなさんの中にも、同じような経験をした事がある人は多いのではないでしょうか。

忙しい日々の中で、自分を休める時間を作ることは大切な事ですが、息抜きだからと言って楽しい事ばかりを優先させてしまうと、本来やるべき事に費やす時間が足りなくなり、その後の自分が苦労してしまいます。

私は、限られた時間をうまく使えずに大変な思いをした経験から、時間配分の大切さを学びました。明日の自分、未来の自分に繋がる価値ある時間を無駄にしないために、みなさんも、スマホやゲームなど息抜きに費やしている時間が多すぎていないか、日々やるべき事の優先順位を意識して時間配分が行えているかなど、時間の使い方について、一度立ち止まって考えてみませんか。

もし、限りある貴重な時間を有効に使えていないのであれば、時間の使い方を見直し、少しでも時間を有効に使う工夫をするようにしましょう。その中でどのように時間を有効に使えばいいか迷った時には、まず、自分にとっての大切なことは何か、それに向けて今やるべきことは何かを考えることで、正しい時間の使い方が見えてくるかもしれません。

私たち中学生は、三年間という長いようで短い限りある時間を日々歩んでいきます。その限りある貴重な時間は私たちの未来を創る土台となることでしょう。それぞれが思い描く明るい未来につながるその価値ある時間を、決して無駄にすることなく、有効に使いながら生活することがとても大切だと私は思います。

大切な時間

甘楽町立甘楽中学校
二年　谷川　絢香

皆さんは、人生を八十年生きるとすると、約何週間あるのか知っていますか？実は、たったの約四千週間しかないそうです。これを聞いて、短いなと感じるか長いなと感じるかは人それぞれだと思いますが、私は短いなと驚きました。そして、一日一日を大切にしていきたいと思いました。そこで、私は一日の最後に、その日の練習や起こったことなどを振り返るようにしました。皆さんは普段、一日を振り返りますか？私は、ある出来事をきっかけに一日を振り返ったときに「充実したいい一日だったな」と思えるようにしたいと感じました。

ある日の学校で、「学校なんか行かないでゲームしていたいな」や「部活やりたくないな」と言っている人がいました。このように思ってしまうことは、誰でも経験のあることだと思いますし、私もそう思ってしまうことがよくあります。でも、学校には家では得られない学びや楽しさがたくさんあると思いますし、部活動も自分が三年間やり続けたいと心に決めて選んだ道です。だから、気持ちを切り替えて嫌なことも頑張ってみたら大会やコンクールでいい結果を出せたり、「今日はよく頑張ったな。いい一日だったな。」とポジティブに思えるかもしれません。そして、自分が決めた大切な目標や思いなので、最後までやり通すことに意味があると思います。

私も、水泳で関東大会に出場するという目標がありますが、練習時間が長い日や、きつい日は「今日の練習嫌だな」と思ってしまいます。そんな日は、自分が目標にしているタイムや結果を思い出してやる気を出すようにしています。きつい練習を乗り越えると「疲れたけどよく頑張ったな！」と達成感を感じられるし、大会で目標のタイムが出ると「あの練習頑張ってよかったな！」と嬉しくてたまらなくなります。

このように、嫌なことから逃げずにちょっとでも頑

張ってみると、嬉しさや達成感を味わえ、次の嫌なことを頑張れるモチベーションになるかもしれません。

もう一つ、きっかけになった出来事は、母が何気なく言った言葉でした。それは、母が昼寝を長くしすぎてしまった日に、「なんだかもったいない一日だったな」と言ったことでした。その日は土曜日で、私も疲れが溜まっていたのでついつい寝すぎてしまいました。その結果、私は宿題が終わっていなかったので次の日に急いでやる破目になりました。なので私も「無駄な時間の使い方をしてしまった」と反省しました。このほかにも、朝起きてダラダラしてしまう、SNSやネットをついつい見てしまうなどで無駄な時間を過ごしてしまう人が多いそうです。逆にいい時間の使い方をしている人は、自分についてよく知る、スケジュールを管理する、早起きをするなど効率的に過ごせるようにしている人が多いそうです。なので、これからは一日の予定を立てて過ごすように意識したいです。

いい時間の使い方は人それぞれだと思います。しかし、一日は二十四時間しかなく、世界平等です。このかけがえのない限られた時間を有効に使って、一日を振り返った時に「充実したいい一日だったな」と思えるようにしていきたいです。

未来に繋げる日本の礼儀

甘楽町立甘楽中学校
二年　髙橋　季歩

皆さんは、先生や先輩には敬語を使っていますか。そんなの「あたりまえだ」と思う人も多いかもしれません。

日本では古くから礼儀が大切にされていて、最近では日本人の礼儀正しさは外国の方からも高い評価を受けています。皆さんも、小さな頃から礼儀の大切さを学び、日々実践していると思います。

しかし、最近少し驚くことが起こりました。家族で出かけた時に、小さな子が私の父に向かって「どけよ。」と言ってきたのです。「目上の人には敬語を使う」ということが常識だと思っていた私にとって、知らない大人に失礼な言葉をぶつける子どもの姿は衝撃的でした。小学校でも、挨拶や言葉遣いについて学んでいるはずなのに、どうしてそうなってしまうのか、不思議に思いました。それと同時に、世界からも認められている「日本の礼儀や伝統」が、これから先の未来でも当たり前に続いていくのか、不安に思うようになりました。

そこで、私は日本の礼儀について調べてみました。まず、なぜ敬語を使った方が良いのかということについてです。敬語には、相手を敬う気持ちを示す、秩序を保ち円滑な人間関係を築く、などの働きがあります。特に日本では、自分の立場や相手への思いに合わせて、丁寧語、尊敬語などを使い分けます。

一方、海外でも、「ありがとう」を表す「Thank you」が「本当にありがとうございます」という意味の「I really appreciate it」になるなど、「丁寧な表現」はあります。しかし、日本のように相手との関係性や自分の立場によって使い分けることはしません。そのため、自分の立場や思いによって使い分

けるというのは、日本独自の文化といえます。

次に、海外の方から見た日本のイメージと、実際に日本に訪れてからの感想です。首相官邸からの資料によると、アンケートを取った十四カ国の全てで「日本人は礼儀正しい」という意見が、訪日前のイメージと訪日後の感想共に上位に入っています。私は、これらの海外の方からの意見は、「相手を尊重し、敬う」という日本の礼儀を大切にし、受け継いできた人々のおかげだと感じました。だからこそ、長い時間をかけて受け継がれてきた日本の伝統や、人々の努力を無駄にしてはいけないと思うのです。

私の両親は、飲食店を営んでいます。お客様からの予約などの電話や、実際に接客している際に、お客様から丁寧な言葉遣いで接してもらえると、「こちらも良い接客をしよう」という気持ちが強くなり、心のこもったおもてなしが自然とできるそうです。反対に、予約の電話でタメ口で急かされたり、料理の提供の際に怒鳴られたりすると、どうしても取り繕ったおもてなしになってしまうそうです。だから、店員とお客様という関係でも、相手への礼儀は必要だと思います。

伝統を受け継いでいくために、日々、目上の人には敬語を使う、他者への敬意を払うなどの礼儀を、私たち一人一人が意識して行う必要があると思います。また、スマートフォンの普及やコロナ禍の影響で、直接対面してやり取りをする場面も増えましたが、画面越しでも、相手を敬い言葉を送ろうとする心遣いが必要だと思います。

日本の伝統を未来に繋いでいくのは、私たちです。日頃の学校生活から、敬語を使うこと、礼儀正しく接することを意識し、あたりまえの習慣として、続けていきませんか。

知らなかった温かさ

甘楽町立甘楽中学校
三年　植松　結希歩

「皆さんのクラスには何人の生徒がいますか？」そう聞くと自信をもって答えられる人がほとんどだと思います。ではもっと広げて考えてみてください。「皆さんの住む町の人口はどのくらいですか？」これに対し、細かい数まで知っている人はごくわずかだと思います。「そんなこと考えたことがない、どれくらいかも分からない。」そのような人が大半なのではないでしょうか。私もその一人です。私はずっと、自分の地域についてよく知っている、そう勝手に思い込んでいました。でも、視点を変えてみると分からないことばかりでした。このようなことから、私は自分の住む地域についてまだまだ知らないことばかりなんだ、そう考えるようになりました。

最近、私は地域の見方が少し変わったように思います。そのきっかけは、別に特別でも何でもないいつも通りの一日に起きました。

ある日の朝の登校中、お散歩をしていた近所の方に会い

「おはようございます。」

と声をかけてみると、その方がニコニコして、

「いってらっしゃい。」

と返してくれました。その途端になんだか心がポカポカしてきたり、応援されているような気持ちになりました。

別のある日の帰り、畑作業をしていた方に、

「こんにちは。」

と言ってみると、

「おかえり。」

と返してくれました。その一言にとても温かい気持ちになり、疲れた体が少し回復したような、そんな気分になりました。

以前にもこのように「いってらっしゃい」「おかえり」と言われたことが何回もあったのかもしれませ

ん。でもそのときはまだ、その言葉がもつ温かさに気付くことができていませんでした。でも、今はこのような言葉をかけられると、とても心に残るようになりました。

「以前と今で何が変わったのだろう」と考えたときに一番に思ったのがあいさつに込めた思いです。今までは正直、あいさつするのがめんどくさいなと思い、適当にしていたことがありました。自分があいさつを適当にしても、元気にしても何も変わらないと思っていたからです。でもある時、私が通学をしているとき、私を見つめながらとても元気に「おはようございます。」とあいさつをしてきてくれた小学生の男の子がいました。その途端にその男の子の声とまなざしと笑顔に私の心は動かされていました。それをきっかけに、あいさつが相手に与える力に気付かされ、その男の子を真似してみようと思うようになりました。だから今では、「相手の顔を見て、笑顔で元気に」言うことが多くなったような気がします。そのおかげで一回一回のあいさつに意識が向き、温かさに気付くことができたのかもしれないと思っています。

また、今では元気に思っている「いってらっしゃい」と「おかえり」ですが、少し前までは疑問に思うことがありました。なぜ、家族じゃない、私のことも知らない人が私に向けてそんな言葉をかけてくれるのだろうということです。家族の中でしか使わない言葉だと思い込んでいたので、頭の中でハテナがたくさん浮かんでいました。どうしてだろうと自分なりに考えてみると、もしかしたら、地域の人たちは私を家族のように迎えいれてくれているのかもしれないというふうに思い、地域という場所が自分の第二の家のみたいだなと思うようになりました。

このように、あいさつをきっかけに今まで気付くことができなかった、地域の温かさに気付くことができました。日常の中にあったその温かさが、いつも通りの普通の一日を特別な一日に彩ってくれます。また、いままではただの通学路だった場所が今では地域の人とつながる場所になりました。そして、地域という場所がただ住んでいるだけの場所から、自分の居場所だ

と感じるようになりました。思い込みや「知らない」「めんどくさい」で自分で勝手につくっていた壁を壊すことで見えなかったものに気付くことができました。それでも、私の知っている地域はまだほんの一部にすぎないと思います。だからこそ私は、もっと地域の好きなところを見つけていきたいです。そしていつか自分の大好きな地域で「いってらっしゃい」「おかえり」と笑顔で言えるそんな大人になりたいです。

自分の大好きな地域がずっとあり続けられるように、たくさんの人と地域がつながれるように、そのためのきっかけを私もつくれたらいいなと思っています。

私たちなら大丈夫

甘楽町立甘楽中学校
三年　中島　千菜乃

「あっ、音が出ない。」そう思った時にはもう演奏は始まっていました。「こんなに目立つ失敗をしてしまった。」「演奏を台無しにしてしまった。」と私は恥ずかしさと申し訳なさで泣き出したい気持ちになりました。

皆さんは部活動やクラブチームでの試合や大会で「失敗してしまった。」という経験はありますか。西部地区吹奏楽コンクールを二週間後に控えた「かぶら吹奏楽祭」でのこと。私は、失敗をしてしまいました。この演奏会には地域の吹奏楽団の他に、私たちと同じ西部地区吹奏楽コンクールに出場するライバルの中学校も出演しています。私たち中学生はコンクールで演奏する曲を本番と同じように演奏します。かぶら吹奏楽祭は他の学校の良い所を学んだり、自分たちの演奏をより良くするためのアドバイスをもらったりできる大切な演奏会です。コンクールとは違い賞がつく大会ではないのですが、私たちは本番と同じように真剣に演奏します。

私たちが演奏した「幸せの魔法」という曲は、私ともう一人の二人でイントロを吹き演奏が始まります。しかし、かぶら吹奏楽祭当日は一緒に吹いている子が都合によりお休みしてしまい、私は一人で出だしを吹くことになりました。不安いっぱいの私は本番前、「絶対失敗してしまう。」周りの人に何度そう言ったことでしょう。そしてその言葉は現実となってしまいます。やはり、私は失敗してしまいました。

「イントロで、ほぼ決まる」この言葉は、かぶら吹奏楽祭のちょうど一か月前に外部講師として部活指導に来てくださった先生の言葉です。コンクールの金銀銅賞の評価がイントロで決まってしまう。イントロ部分を担当する私にとって、大変大きなプレッシャーになったことは間違いありません。また、先生は「見逃さない。妥協しない。あきらめない。」「できないの

は、努力が足らないからだ。」とも繰り返しおっしゃっていました。

かぶら吹奏楽祭の後、「本番じゃないから。」「一人だったしさ。」「本番は頑張ろう！」とたくさんの人が励ましてくれました。感謝の気持ちでいっぱいになるのと同時に自分が情けなくなりました。「私がもっと練習をして失敗しなければみんなに気を使わせずに済んだのではないか。」と。それから、本番までの二週間は必死に練習を重ねていきました。しかし、練習しても成功する回数よりも失敗してしまう回数の方が多かったです。練習が嫌になり、何度も投げ出したいと思うこともありました。そのたびに、かぶら吹奏楽祭での悔しさや外部講師の先生の言葉を思い出して練習を続けました。

そして、西部地区吹奏楽コンクール本番当日。先輩からメッセージカードをいただきました。そこには「最初の頃よりとても上手になったね。自信をもって頑張ろう！」と書いてありました。それを読んで私は、「ああ、私に足りなかったのは自信だったのか。」と気付くことができました。思えば私はいつも「自分はきっと失敗してしまう。」とどこかで思っていて、自分に自信がなかったのです。そんな私に自信をくれたのは、失敗をしないためにこれまで積み重ねてきた練習でした。「あんなに練習したのだから大丈夫。」そう自分に言い聞かせるようにして私はステージに立ちました。

「成功した！」私だけでなく、私の失敗を何度も見てきた仲間の全員が安心した瞬間でした。もちろん、練習と自信だけで必ずうまくいくとは限りません。しかし、練習量や自信があるかないかは、自分の力を発揮できるかどうかに大きく関わってくるのではないでしょうか。緊張や不安を完全に取り除くことは難しいです。しかし、練習した分だけ自信をつけることはできるはずです。

私は、コンクールが終われば吹奏楽部を引退します。今、中学校最後のコンクールに向けて今年の曲を練習しています。昨年とは違う曲を新しいメンバーで完成させるのはとても大変です。だからこそ、「私な

ら大丈夫。」「あなたなら大丈夫。」「私たちなら大丈夫。」と自信を持って演奏したいです。

【メモ】